

20以上前に大学の図書室で、その存在すら知らなかった緑と黒の「物性研究」を数年分見つけ、しばらく図書室に通ってそれを読みふけていた事が、その後の自分の研究の紆余曲折の始まりだった気がします。その頃はこのような場に寄稿する事になろうとは全く想像していませんでしたが、月日の流れと研究の世界の不思議さと多くの人の支えに感謝しているところです。その一方で、このように自分を引き込み成長(?)させくれたものが、今も同じように若い人の周りにさりげなく置かれ、その頭に何か響かせているのだろうかと思うと、昨今強制的に進行する電子化の波の前では不安だけがこみ上げます。

「物性研究」にはこれまでに研究会での発表報告や依頼原稿等の記事を幾つか載せてもらいましたが、本当に自由に書かせて頂いた覚えがあり、またその周りも非常に自由に書かれた記事に(誤解を恐れずに言えば未熟で未完、しかしもとても挑戦的・野心的なアイデアや議論に)溢れていた印象もあり、自分はそれこそに魅力を感じています。特に研究会の発表報告記事では、招待講演をされた先生からポスター発表をされた若い学生まで、似たような紙面で記事を書く事になるため、読むだけでなく書く事も刺激となるととても良い場、機会が提供されていたと思います。

昨今のとりあえず何もかもを「分かり易い成果」で点数化する世の流れの中では、こういった刺激の価値は見えづらくなっているのではと思います。でもいつまでもそばにあって欲しいものでありますが。贅沢でしょうか...

(A. A.)